別紙１－１

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※　甲　　第　　号

氏　　名　　福岡　未紗

論　文　題　目　　印象と態度がグラフ理解と判断に与える影響

論文審査担当者

主　査　　名古屋大学教授　　三輪　和久

委　員　　名古屋大学教授　　川合　伸幸

委　員　　名古屋大学准教授　　北神　慎司

別紙１－２

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

人は日々、図表で表現された外的情報を取り込み、そこに解釈、および意味づけを行うことで、判断を下している。本研究は、外的情報を表示する図的表象として、棒グラフを取り上げ、グラフ理解と判断のプロセスに、対象に対する印象や態度がどのような影響を与えるかを検討している。一般に人は、情報を理解した後に判断を下す場合が多いが、逆に、判断を先に下し、それを正当化するために情報を理解しようとする場合もある。そこで、前者のような「一般的な状況」と、後者のような「正当化するためにグラフを利用する状況」のそれぞれにおいて、印象や態度の影響がどのように変わるかを、対比的に検討している。

第 1 章の「序論」では、本論文に関係するグラフ理解に関する研究を概観し、本研究の背景と目的が提示されている。

本論文では、第 2 章から第 5 章にかけて、6 つの実験が報告されている。本研究では、一貫して、1 要因 2 水準の独立変数に対して、1 つの従属変数を説明するグラフが提示される。参加者に提示されるグラフは、縦軸のスケールを操作することによって、独立変数の両水準における従属変数の値の差異が、知覚的に異なる見えを表すように設計されている。第 2 章では、実験 1a、および実験 1b を通して、実験刺激としての提示グラフを、理解、判断するプロセスの特性を明らかにしている。

第 3 章では、当該事象に対する印象を操作した 2 つの実験を実施している。具体的には、実験 2a では、グラフ理解後に判断を行う実験を、実験 2b では、判断後にグラフ理解を行う実験を実施した。実験の結果、グラフ理解後に判断を行う状況では、印象は、グラフ理解と判断のそれぞれのフェーズに影響したが、一方で、先に下した判断を正当化するためにグラフを利用する状況では、印象は判断とグラフ理解のいずれのフェーズにも影響しなかった。

第 4 章では、実験に先立って、参加者が抱いている当該事象に対する態度をあらかじめ測定した。実験 2a、2b と同様に、グラフ理解と判断の順序を入れ替えた実験 3a、および実験 3b を実施した。実験の結果、グラフ理解後に判断を行う状況においても、先に下した判断を正当化するためにグラフを利用する状況においても、参加者の態度は、判断のフェーズのみに影響することが明らかになった。特に、前者においては、グラフの理解とは独立に、事前に抱いている態度に基づいて、最終的な判断を行うことが確認された。

最後に、第 5 章の「総合考察と結論」において、本論文の総括を行い、今後の研究の展開についての課題を述べている。

丹念な分析に基づき提出された知見は、グラフなどの図的表象の認知に関する新たな見識をもたらすものであり、その学術的価値は高い。よって審査委員は、全員一致して、福岡未紗君が、博士（情報学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと判定した。